古文書古典籍の装幀形態と料紙及び修補作業

吉　野　敏　武
（宮内庁書陵部修補係長）

このワークショップでの講演は、私自身が常に現物史料を持参して説明してきた方法で史料をオープン展示し講演するということで、募集人員よりかなりの方が参加されたため、話の流がうまく作れなかったことが思い出される。しかし、東洋文化研究所で「アジア古籍のワークショップ」の講演を完全な形で書とすることとなったとの依頼があり、講演内容のテープ起こし文を送付していただき読んだところ、史料を前に話した時は参加者が現物史料を見ながらであったため、ご理解していただいたと思っておりましたが、テープ起こし文のままでは意味が通じない部分や内容もかなり不備もあったことで、話の内容に沿って訂正を加えさせていただきました。訂正も当日の講演の話し内容をあまり変えないようにするつもりでしたが、間違いや説明内容が離れていたものは関連部分に移動し、説明が足らなかった点は訂正加筆したものといたしました。多少判りにくく講演内容と相違の出た部分もあるかもしれませんが、講演した内容を少しでも判るように訂正加筆いたしましたことを、ご了解、ご了承下さい。

装幀と料紙

装幀説明をするときには、現物資料を見ていただかないと皆様が全然分からない部分が出てくると思うので、私が永年を掛けて収集した史料ですが、もし扱いが悪くなければ、紙素材を触ることも許可いたしますのでお触り下さい。近くに寄らないと分からないので近くに寄って見て下さい。

レジュメで説明している紙の説明資料は、中国の文献に記録された資料から集めたものです。最初に紙がいつごろから作られ、どのようなものがあるかを列挙してあります。今までは蔡倫が紙を発明したといわれておりますが、それ以前の前漢時代にすでにこのような紙が作られたことが判ります。ただし、これは書写用紙としてではなく、戦略的な地図とか、いろいろなことで使われたようなものがほとんどです。作られた繊維は麻紙が大半で、衣類などの麻や漁網・靴などの古いものなどを裁断し、煮熟し後に打解して粉々に繊維として漉いて紙にしたものです。

その次に、なぜ装幀と料紙の関係を言うかというと、現実に史料を目にすることが少ない皆さんは、書写される料紙は加工されずに書かれているものと思われがちですが、江戸時代までの紙を見て触れてきた観察から、書写されたほとんどの料紙が打紙加工が必ずなされていました。それはなぜかというと、書写紙面が打紙加工されていないと筆滑りがわるいが、打紙加工されたものは筆滑りが非常にいいからです。要するに、墨を付けて書くときに、紙面にざらつきがないために滑るように流れるように書けるということで加工がされているのです。

現物史料に移りますが、いちばん向こうに置いてあります経巻は『大般若波羅密多経 巻第一百六十七』（写真 1）で、楮繊維で萱簀溜漉きでキハダ染めされ打紙加工されている。現実には、紙を漉くときに填料として米粉が入れられて漉かれております。それはなぜかというと、楮の繊維が長すぎるためにその間の空間が空いてしまうので、それを埋めるためとも考えられます。この経巻を知人に見せたところ、刊記はないが書写している文字がかなり丁寧な筆跡で、書写文字から多分鎌倉初期の書写ではないかとのことでありました。この経巻は、巻子本から折本に改装されていたもので、手に入れてから原装の巻子本に戻しましたが、改装された経緯がわかるように折目はそのままにしております。改装されたのは、巻子本では見開きに不便で見にくいことから折本とされていましたが、折目の損傷はそれほどではないので巻子本に復元したのです。ちょうど今開いている巻のところに横界線の墨筋が紙背面に写っています。こういう罫線を引く場合、巻子本は最初に書写する料紙を文字数と行数を考えて丁数を用意し、大きさに裁断した後に接いでロール上に全部巻いてしまいます。その次に、横界線を終わりまで全部引きます。それから縦の罫線を徐々に引いていきますので、これがどのように作られているかを調べるには、接ぎ目では横界線の段差が出ておりませんが継ぎ目ではない本紙途中のところに、墨線の太さや段差ですが（写真 2）、たまたま見付けることができた墨線の段差があります。しかし、奈良時代の写経書にはこの様な段差はなく、ほんのわずかであるが太さが乱れたところも見られることで、界線引きがどのようにされていたか判ると思う。そうすると、その巻子本の成巻方法を調査することがきると思います。また、この書写面を見ると、打紙加工しているから表面に書かれた書写文字にかすれや滲みがでておりません。

『三十六人歌撰集』（写真 3）は、雁皮繊維で溜漉きの鳥の子紙ですが、この様な紙にも填料の米粉が入れられ打紙がされています。この『三十六人歌撰集』は筆跡が本阿弥光悦流で、その筆者は光悦流の関係者と考えると雁金屋の五代目の尾形宗謙（1621 87）と思われます。宗謙の父道柏の妻は本阿弥光悦の姉であり、宗謙はその光悦流の弟子から学び継いで

いたとすると、宗謙が書写したものと思われます。そうすると、この書は江戸初期と考えられます。また、著名な尾形光琳・乾山は、この宗謙が父になります。

次に、小さい方は巻子本で江戸中期以降のもので、上が天保五年（1834 年）富春軒専慶筆『桑原専慶流花道免許状』（写真 4 の上）で、雁皮繊維で泥入りの間似合紙です。桐箱に三巻が入れられて箱書きがされており、箱に左下に「太田慶道秘蔵」と書かれている。紙背にきららが引かれた下が万延元年（1860 年）徳川流第二世本松齋筆『徳川流茶道伝受書』（写真 4 の下）で、雁皮繊維で泥入りの間似合紙で紙背を濃密なきらら引き加工が施されている。この筆者を系図などで調べて見たが調査結果はでませんでした。

次の折本とされているものは、明応八年（1499 年）の『大般若波羅密多経 巻第四百九十四』（写真 5）で、楮繊維で米粉填料が入れた溜漉き楮紙でキハダ染めされ打紙加工されています。もともとは巻子本であったものを折本に改装されたものです。こういうものを調べるときに一番判りやすいことは、文字部分が折目に入っていたら、まず巻子本の経巻であったものを折ってしまったということであり、折本とする場合には書写文字が折目にこないようにするため、そのような部分を探すことにより判断できると思います。

それで反対側の『妙法蓮華経如来寿量品 第一六 六』（写真 6）の印刷本ですが、楮繊維の萱簀溜漉きで表面に薄くきらら引き加工が施されてから印刷されています。この折本は、年度が書いていないのでいつ頃の年代のものかは判明しなかったのですが、古書店の販売目録を見たところ江戸初期とされた巻子本の書の写真が掲載されていたので、その目録と比較したところ同じ印刷形態をしていたので、この書も江戸初期だと考えると同様の時代と考えられます。この書の折目を確認したところ版木自体が折本用に作られたのではなく、巻子本用の版木を使って刷って巻子本となっていたものを、後に折本としたものではないかと考えられ、朱で点や読みがふられているとともに所々に角筆も書かれています。

このような印刷された折本も全部巻物状にして印刷されますので、1 枚 1 枚を印刷してから貼り継いでいるのではなくて、まず印刷する必要枚数の長さを巻物状にしてから、巻頭の版木から 2 枚目・3 枚目と文字間隔を考慮しながら最後まで刷られています。貼られた継ぎ目部分を観察するとその部分に印刷文字が両方にまたがっているのが見られることは、継いで刷ったものと判断ができます。

版木の長さに関して一番知りたかったのは、彫られている版木の長さはどれぐらいであったのかということです。ものすごく天地高や文字が精密に彫られているのでわかりにくかったのですが、印刷本で調べて見ました。行の曲がりや段差のあるところが版木の端ではないかと考えられる部分もありましたが、次の部分が分からないので版木の一枚の長さは判明し

ませんでした。このような印刷をかなりの折本を調査したのですが、版木の文字の曲がりや段差がなく、印刷文字の天地や刷りがかなり精密にすられていることが判明しただけです。

次、こちらは仏教の作法書で元文二年（1737 年）河州寳田山比呼到岸筆『傳法灌頂三昧耶戒作法』（写真 7）は、何代かに書写されたもので最初から折本にする書写形態をとり、雁皮繊維で紗漉き鳥の子紙が使用されています。ちょっと珍しいのは、横界線はちゃんと引いていますが、折り目に当たる部分は墨線が省かれているところです。折り目以外の境界線は全部縦罫線が引かれています。

その反対側にあるのは、中国にある胡蝶装、蝶装と称される書です。要するに、印刷物を薄様で印刷するようになってから、それを製本するに当たって、印刷面を内側に折って、その背中だけを糊をつけて固めたものです。ですから、これは表紙の背中についているのですが、表紙があまり軟らかくて、軟らかいと湾曲しますよね。そうするとすぐ剥がれてしまいます。それで、このもの自体はかなり厚くしています。これは線装本『大般涅槃経 巻第二十』（写真 8）で、嫩竹(どんちく、若竹のこと)の竹繊維で漉かれたもので、清代の本を装幀勉強のために胡蝶装に改装実験したものです。

その次にこちらにありますのは、粘葉装の貞享四年（1687 年）阿闍梨教春房覺等筆『流灌頂支度并図開眼供養』（写真 9）で、楮繊維で萱簀溜漉きされた楮紙にきらら引きがされた料紙に書写したものである。製本は、糊が 1 枚を二つ折りにして折った部分が 3 分（9 ミリ）ぐらいの幅で、折られた紙同士の折り目背側を糊で貼り付けた糊綴本です。粘葉装は、製本されてから書写されたものと、書写してから製本したものとがあります。糊綴じ部分を剥がしているキハダ染めのものは、宝暦九年（1759 年）金剛佛子義空筆『胎蔵界念誦次第』（写真 10）で、楮繊維で萱簀溜漉きでキハダ染め加工が施されて書写されたものであり、書写と装幀が判るように糊綴じを剥がしたものですが､貼られていた部分に数字が書かれています。ということは、押界がされた後に 1 丁 1 丁に丁数字が入られて両面に書写されて、製本されたという例として非常に分かるものです。このような粘葉装は、書写面に墨界線は引かずに二つ折りにして枠界線と行界線の押界を強く引くことで、後ろ側の界線は薄くなるが筋が出ているため行内に書写できます。

その反対側にありますのは、今、現在の書誌学用語辞典で列帖、綴葉といわれているものなのですが、昭和初期までは大和綴といわれていた江戸初期写『素性集』（写真 11）で、表紙は雁皮繊維の打雲紙に装飾加工が施されており、本紙は紗漉きの鳥の子紙に書写しています。この様な大和綴に使用されているものは、雁皮繊維で填料に米粉を入れない、飴色をした斐紙と米粉填料の鳥の子紙が多いです。

この形態のものが書陵部に所蔵されており、書の付け紙に装幀名称が書かれたものが付けられていますが、大和綴のとじは糸偏（「綴」）ではなくて、閉じるの「閉」で表記されています。その書は、江戸後期書写の鷹司本『奥尽抄』という書で、書に貼られている付け紙の手紙文書に各括の枚数と共に「大和閉」と書かれております。ですから、私の呼称では江戸時代の名称の「大和閉」ではなく、「大和綴」と書いて括弧づけで列帖装・綴葉装と表記しております。書誌学辞典を踏襲するのではなく、昔の名前に戻しただけです。

この大和綴の書写には、親本同様の括数と同様の丁数の括文の用紙を用意し、それぞれの括となる数丁を一緒に折り曲げられて、数丁を折った括の上下の仕上げ裁断の外側端に針穴を明け、細糸で結んで括を止めて書写されます。物語のように数帖あるものは、1 帖の全括が書写されたものは括の上下に結ばれた糸を束ねて結んで置き、全帖が書写されてから本製本となります。

あと一つは、これは書陵部所蔵で大和綴になる写本があり、桜町天皇の勅願で写された『源氏物語』五十四帖を公家の名筆家に書写させていたものです。その書写時に使われていた書写道具の「桧糸罫」（写真 12）は復元品です。書陵部に残存しているのは枠だけしかなく、貼られていた部分が剥がれ糸も消失してしまっていたため、複製品を復元しようとしていた時、偶然にも大工が来ていたので、現物品の厚みである桧 2 ミリ厚を作って貰い、私が現物品を見ながら復元して作製したものです。この糸罫は、料紙竪三つ切りにした 6 半本の大きさで折目側が細くなったものです。書写料紙は、書写する親本の一括の枚数を二つ折りにし、括の料紙がばらけないように製本時に裁断される外側の折目上下に針穴を明け、その部分を細糸で結んで糸端を紙で糊止めしてあります。

糸罫の使用法は、1 枚目の 2 頁が白紙であれば、その次の頁から折目右に細い部分を合わせて置いて書写します。次の頁は、頁をめくって折目に合わせ左に置いて書写します。この糸罫を回転させて書写してゆけるように作られております。写真 13 は「桧糸罫」を使って書写している状態です。

このような書写道具はいろいろなものが作られており、書陵部の展示会で 4 年前ぐらいに行った「書写と装幀形態」の時に、様々な書写道具が展示されました。ただ、書陵部の展示会は、大学や研究者などを主体とした展示会であり、研究者や大学に招待状が配られるため、招待状がない方は入場できない展示会です。

現在、書誌学辞典で称される大和綴は、今結婚式場で使われている結び綴のものです。昔の『和漢名数大全』（写真 14）という江戸時代に出された豆本ですが、ここに湯島聖堂に献上したものの目録が出ているのです。甲府、尾州、それから紀州、水戸、松平讃岐守とか、

そういう名前で全部どういうものを出されて、どういう装幀をされたものかと書いてあるのです。そこの中に水戸から出されたものに、『旧事紀』『古事記』『日本紀』『日本後紀』『続日本紀』『続日本後紀』『三代実録』『文徳実録』が挙げられており、説明部分に「書本也、表紙黄色紫糸ムスビトジ」と書いてあり、江戸時代には結びとじといわれていたのです。だから、正確な名前というのは、江戸時代にあった結び綴じを大和綴と呼び、大和閉であったものを列帖、綴葉にされたのは、それは昭和の初めのころに書誌学者が集まって付けられた名称となって、現在の装幀名称になっているのです。

こちらの印刷された粘葉装は、江戸後期と思われる『高僧和讃』（写真 15）で、楮繊維の萱簀流漉き料紙の表裏に印刷されているのです。印刷面のひどいところを見ると、表裏の印刷面が文字同士が重なればいいのですが、かなりずれが生じている丁が多く見られます。このものには、大和綴にされたものもあるがこの書同様の印刷であり、この様な経典類の印刷本の製本では背が裂で覆われているものが多いです。

こちらの唐本は、清代の『古文析義 巻六』（写真 16）ですが、この書は嫩竹（どんちく、若竹のこと）の竹繊維で漉かれたものですが、よく皆さん竹紙と言われています。竹紙というのはどこで分かるのですかといわれますが、よほど見慣れないていないと分析しなければ分かりません。でも、これは竹の葉っぱが入ってしまっているものがあり、日本ですと塵として取り除かれてしまいますが、取り除かれずに漉かれていた紙に印刷しているので、葉っぱの上にも印刷文字がのっています。

この書は、書誌学事典を見ると金鑲玉（きんじょうぎょく）で、明末の汲古閣版の後刷り本『儀禮註疏 巻第十六』（写真 17）も、『古文折義』同様の竹繊維で漉かれたものです。

金鑲玉というものはどのような形態か、装幀研究している方は書誌学辞典で知っていると思いますが見たこともないのではないでしょうか。これは中国での貴重な古籍保存方法の一種で、入紙製本なのです。中国で善本を保存するために、1 冊の本をきれいに残すための表紙部分から、全部このように入紙製本されるのです。製本されて、高さが本紙とここが絶対に、1 枚だけだとこっちに沈んでしまいますね。閉じる部分で、こっちもへこんでしまいますから、その部分も入紙がされています。この金鑲玉とは、本紙が黄色みを帯びているため金にたとえ、周りの入紙用紙の白い部分を玉にたとえていることで、玉が金を囲み守っていることからこの金鑲玉の名称となっているとのことです。

この入紙製本は、書より大きな紙に本紙端を糊止めして入紙しており、本紙よりでた紙を本紙に付け合わせるように裏側で折り畳んでいるのです。向こうの紙は切り方が乱雑だから、きれいに付けられることはないのですが、上下最初に折った後に綴じられる部分も同様に折

り込んでから、中綴じをしてから天地背を裁断します。ただ、中綴じは細い部分もあるので、その部分も紙縒りで通して取れないようにしています。その後、三方を裁ったものに表紙を付けて綴じられた製本がされています。

中国の漢籍の製本は、大陸的ですごく雑な製本がされており、中綴じが糸綴じ外の文面側に出てしまったものが多いのです。ほとんどが無造作に製本されていて、中綴じ位置をよく観察すると糸のところより文字面の方に出ているのがよく判りますので、観察してみると良いでしょう。唐本の中綴じは、紙自体はものすごく脆く弱い紙ですから、日本のように2穴開けて結わくとその部分が裂け破けてしまうおそれがあります。ですから、単穴でくさび形の紙を縒り単穴に通して止められます。この中綴じを坊主綴じと云います。

特にこの紙縒りとされているものは、刷ったときの失敗した反故紙を使って中綴じ用にしています。この書の見返しに貼ってあるものは、旧装時の中綴じに使用されていた紙で版心部分があり、汲古閣と印刷された版心があります。汲古閣というのは、明代末に数多くの書を収集し出版事業をした人なのです。ただし、この書はあまりにも版木がひび割れた部分もある刷りであるため、多分清代に入ってからの後刷りと思われ、清代もそんなにたっていないだろうとも思います。これが金鑲玉というものです。

この金鑲玉の入紙された天地部分の帯が内側に入っているのですが、表に出ているものもあると聞いたことがあります。表にあれば紙が脆く弱いため必ず引っかけて切れるので、必ずこの入紙帯は中に入っていないとだめなのです。現実には、これを製本するときは綴じた部分に入紙用紙の白が出ないように内側に綴じられるのですが、入紙した形状が判るようにわざわざこういうふうに綴じをしたのです。人に説明するとき、この装幀を説明しても現物がどのようになっているか理解できないと思いますが、書陵部に昭和2年から5年まで北京瑠璃庁から古籍修補のため中国人2名が招聘され修復にたずさわっており、その中国人が修復したものや金鑲玉で製本されたものが所蔵されています。それらの書を見ると入試用紙の白い部分が見えません。

金鑲玉の入紙製本方法は、本紙を広げその大きさの天地幅に折り曲げる分まで、入紙用紙を余分な分の計算した大きさで、本紙と厚みが同じくらいのものを用意します。この書の入紙に用いた紙は、書道に用いる宣紙ですが、良紙ではなかったためやはりしみが少し出てきてしまっています。ですから、この製本には良質な紙を購入し大きさのものをまず作り、その入紙用紙をまず二つ折りにした入紙用紙の折に合わせ本紙を中央に置き、そこの下部の本紙中央に針で穴を明けて、入紙用紙全部に下まで針穴で印を付けておきます。折り畳んだときに本紙が同じ位置に揃うように、針穴に合わせて本紙に差し込み、針穴に合わせて入れた

本紙の背側端の部分だけを糊で留めて置きます。

今度は、糊で止めた入紙用紙は本紙を下にして広げ、折り畳むときに上になった入紙用紙から本紙がかすかに見えますので、本紙天地より上下に飛び出た入紙用紙を本紙端に合わせて内側に折り曲げます。上下を先にやると、折り畳まれたものは綴じ目側まで出ておりますので、その綴じ目側を上下に折った入紙用紙の本紙天地部分の両側半分をあまり切りすぎないようにして切り、背端に付け合わせて折った後に二つ折りに戻します。それで全部そろえると、これが一定の間隔に折り畳まれますので、裁断したときに折られた紙が外れないように、天地の折られた 2 ヵ所と背側 2 ヵ所の計 4 ヵ所の中綴じをしてから裁断します。ですから、これは慣れればやれないことはないけれども、かなり苦労します。

これが金鑲玉は、中国ではこの装幀で製本されている表紙には紺色の姿青書皮宣紙という紙が使われますが、古い時代のものでこういう色のものは少ないはずです。どっちかといったら、こういう茶色系統のほうが明代でもそれ以前でも多いです。ただ、中国の印刷本を見ると、本を古く見せためか価値を上げるためと思われることで、古色に染められているものが多く見られます。ひどいものになると、染められていない部分が白く残っている書もあります。それは向こうの人の考えでは気にしていないみたいで、平気でやられた書が数多く見られます。

（Q）　内側の紙は 1 枚だけですか。

（吉野）　いちばんいいのは、ちょっと待ってください。天地部分に出た入紙用紙の内側を出すと、写真 17 のように下側に折りたたまれております。

（Q）　それと、差し込みとおっしゃいましたが、差し込むと今度は逆にそこの部分が厚くなってしまいませんか。

（吉野）　差し込むのではなくて、折り畳んで本紙に付け合わせるのです。

（Q）　ちょうど同じところに。

（吉野）　同じところにいくようにするには、非常に手間のかかる作業です。これを作るには紙自体は上下背側を折り畳める大きさが必要で、折り畳める大きさにしたものを用意し、折り込みがあうようにするには入紙の紙を正確に切っておかないと、それができないのです。このような書は、皆さんがよく知っている三省堂の近くに古書会館がありますので、私はそこへ毎週金曜日に行って徐々に集めました。ただ、巻子本とか、この辺にある黄表紙とかは

そういうところには出ていませんので、他で購入しました。

この漢籍を見て判りますが、糸綴じより内側に下綴じの紙縒りが止められた跡があるでしょう。向こうは大陸的なのか、実際この本をきれいに作ろうなどという発想が全然なく、どんな本を見ても内側の方に入ってしまっているのです。紙縒りもこの反故紙を使っているからものすごく太いものが使われております。我々だったら気を遣って細くすることも考えますが、そういうことはお構いなしです。

皆さんが集めるときに厄介なのは、漢籍はほとんど安く売られていないので毎回行くことによって、時々良書ではない端本が 2000～3000 円で売っています。絶えず古書展に行って見ることは紙の勉強にもなるとともに、安い史料の装幀見本集めにもなります。この書は、後から漢籍の修理のほうで使いますが、この汲古閣の本は 30 冊前後で端本のいろいろなものが入っており、その葉っぱが入った本もその中の 1 冊です。これらの書は、3000 円前後くらいだったと思います。このような安いものを求めて行くことで、自分の装幀勉強や料紙勉強にもなるのです。

それで、あとは和書より大きな朝鮮本です。写真 18 は見本に作った複製本の『國朝寶鑑 巻之二十二』の朝鮮綴じという綴じ始めと綴じ終わりの部分で、五つ目で綴じたものの本紙と後見返しの間で綴じ留められている部分です。外に出ている糸は上から 1 穴目と 2 穴目の綴じた竪糸の本紙と見返しの間の部分に潜り込ませて入れられます。

本紙は、朝鮮独特の料紙で糸目の幅が 5 分（15 ㎜）幅しかない紙です。現在の韓国では、昔の紙のようなこの様な糸目幅の紙は漉かれていないのが現状で、わが国のような紙表情が多くなっています。

綴じ始めと綴じ終わりは、巻末側の本紙と見返しの間から糸を長めに残して始まり、綴じ始め部分に戻って一度結んでから方花結びで結び止めてから、長く止められた糸を綴じられた背側の中に入れています。綴糸は、三本撚り太めの赤糸が使用されています。朝鮮本はほとんどこういう形でとじられていて、綴じ始めは一番上から始まっているものが多いのですが決まりはないようで、下のほうのときもあると聞いております。文様も紗形で表紙裏打ちに使用されているものは白紙の場合もあるが、書陵部所蔵の朝鮮本を修補したとき、表紙の損傷が酷かったため表紙を見たところ、本紙の印刷ミスした反故紙で裏打ちしたものが出てきました。それは中国の史書の印刷本であり、剥がしてみるとつながるものがあったので、付けて復元し一枚にしたところ、印刷された表紙折りの部分の大きさがあり、かなり大きな紙に印刷されたものでした。かなりの丁数ができて、史書の巻の一丁から三丁くらいの欠で数冊がまとまりましたが、表紙に裏打ちされていた現状を変えずに冊としたため、朝鮮本よ

りかなり大きな本となってしまいました。現在朝鮮本の付属品として所蔵されています。朝鮮本の表紙は、キハダ染めで色が濃く紗形紋様もかなりしっかりと出ています。表題は短冊形の題簽が貼られているのではなく、表紙直に打付け書きがされているものが大半です。表紙の反故（写真 19）ですが、裏打ち用紙に反故紙が使われているが、この表紙自体間違って付けられた形跡があります。それは、左側の幅の広い部分は綴じ目側でないはずであるのに、糸綴じ跡が折りの幅広い面になっており、右の幅の狭い方は綴じ目側にはいる面です。書陵部所蔵の付属本のものの天地は、この反故表紙の天地より幅広く折られています。この表紙反故は、紙の使用方法を考えるとかなり後世のものと考えられます。

書陵部にもかなりあったのですが、問題になり韓国側から朝鮮本は返還されるべきということで、日韓交渉で国関係の所蔵館の朝鮮本の大部分は返還しております。略奪して持ってきたわけではなく、購入してきたものでしたが返すべきとのことで返還されたのです。

書の勉強に必要なのは手本となる書ですが、中国での名筆家の書の大半は紀元前の名筆家であり、紙資料ではなく石碑に彫られて伝わっており、その石碑から拓本を取って書道お手本とされた帖で碑法帖・法帖と称されるもので、書の勉強には長く広がる必要がないため、2 頁分だけ見開きはできるが全丁を伸ばしてみることができない装幀形態を持ったものです。

製作方法は、大きな石碑から拓本を採ったままだと大きすぎるため、小型化するために拓本の行を全部竪 1 行に刻み、頁の竪行に収まるように長く切られた文字数を横切りします。頁内を 4 行にする場合は、同じ文字数で 2 行目・3 行目・4 行目と長さに横切りし、この 4 行を字が掛からないように 1 枚に貼り継いで行く。この作業を繰り返し拓本の最後の頁まで行います。次に、法帖の姿にするために、頁となった 2 頁の中央と両端の余白紙を本紙の上に少しだけ掛けて貼り込み、最後に 2 頁をつなげた天地部分の長さに余白紙を貼り込む。この作業を全頁行った後に 2・3 枚の紙が裏打ちされて厚くされています。

装幀の製本方法は、厚く裏打ちされたものを二つ折りされ、折目側が同じ方に揃えられて重ねられ、折目反対側の小口側の裏側で糊留めしているため、見開き頁しか開くことがない伸びない形態となったものです。

『天冠山帖』（写真 20）の法帖の拓本面を良く観察したところ、石碑から採って貼り接いだ後がないのは、木版に作られた法帖の頁同様に彫って拓を採ったものと考えられ、4 行の間には貼った痕跡がありません。本物は文字行は貼り込んで帖とされていますが、この書は帖とされていた拓本面を木版に彫り、石碑拓本同様に拓を採ったものと考えられ、行面の切れ目が見られませんが、石碑から拓本を採ったような雰囲気となっており、装幀自体は古来

の法帖装の形態を持ったものです。

表紙は、表裏単独のもので板表紙や裂で覆ったものなどのほか、蝋染紙という紋様を彫った版木の上に紙を載せ、その上に蝋を塗って紋様を艶出した紙を使ったものもあります。裂で覆ったものには、裂が高価なため表表紙は全部裂が使われていますが、裏表紙になると四周の縁のみを裂で覆い開いた部分に紙が貼られたものなどがあり、土台となっているのはボール紙に類似した馬糞紙というものが使われています。また、表紙の土台に板を使い周りに細い黒檀の細工したものが付けられ、その内側には裂を貼ったものもあります。

江戸時代に流行った読み本類の草紙本は、古いもので黒本・赤本・青本などがありますが、そういうものはちょっと手に入れられません。入札会へ行っても高すぎて買えません。これらの黒本・赤本・青本の本紙は入札の会に出ていたので、全部の中を調べたところ反故紙を漉き返した紙に印刷されており、要するに反故紙の墨が溶けているため薄ねずみ色がしており、すき直した紙に印刷していると判断できます。

この『碁太平記白石噺 四』（写真 21）は、表紙が黄色であるため黄表紙本といわれ、本紙は漉き返しの紙に印刷され 5 丁で 1 冊となって、綴じ幅も狭く綴糸は麻糸の細糸のようで、中綴じはされていません。

この黄表紙本以降の草紙本は、上・下巻の 2 冊となって 5 丁で綴じられていたものが合体した 10 丁で 1 冊となっています。上巻の 1 丁目の欄外に「一」 の数字があり、6 丁目は「二」となっており、下巻の 1 丁目の欄外に「三」で、6 丁目には「四」となっております。こういう具合に昔の姿を残しています。要するに、2 冊が 1 編の組み合わせとなっているのです。2 冊 1 編のもので、よく見るとお分かりになると思うけれども、上下巻を並べてみると絵が一つの絵となっています。この『室町源氏胡蝶のま紀 十五篇』（写真 22）は、販売当初の畳紙の付いたものです。こういうふうに畳紙が付いている例は珍しく、なかなか見つけることができないのですが、偶然に古書展で見つけることができたのです。2 冊を 1 編として、畳紙に入れられて販売されたと思います。表紙は、正確には分析していないのですが、この表紙に使われているのは多分奉書とは違って杉原系統だろうと思います。このような草紙本は時々出ていますが、虫食いが激しいものが多くなかなかこの様なものは出てこないです。畳紙脇の一点は、1 枚の紙で表紙と包み紙としても形がおかしいことから、次の発行書はこういうものを出しますというもので、これは多分宣伝用のチラシではないかと考えます。この様な草紙本は、細い絹糸と赤い糸で綴じられており、中綴じはされていません。

写真 23 は収集した何点かの草紙本の表紙部分と裏表紙を表裏で並べたものです。

この様な書以外にも、貝葉装という 1 枚 1 枚になったこういうものなども古書展に出てく

ることがあります。このほかには、羊皮のパーチメントや若牛皮のベラムの装飾リーフのほか、パーチメント風に獣油を塗ったリネン紙も紙の研究のために収集してありますが、今回は持参してきませんでした。

写真 24 は『徳川第十一代将軍徳川家斉黒印状』、小出信濃守宛の檀紙に書かれた文書で、包紙は杉原紙です。ただ、この檀紙は、板紙みたいにすごく厚いもので、備中国広瀬(高梁市)の柳井家の献上・上納紙と考えられます。

この檀紙になぜ皺紋がないかというと、本来檀紙には皺紋が付いたものはありませんでしたが、江戸時代になってからは、木版に皺紋を入れて作り出したものがどんどん作られております。今、檀紙といわれると皆さんは、この皺あるのを檀紙だとすぐにお考えになると思いますが、江戸以前には本当はこの様に皺紋のないものだったのです。

いちばん分からなかったのは包紙の杉原紙に関してです。前田育徳会尊経閣文庫に所蔵され、文化財指定されている『百工比照』の紙の巻を閲覧させて貰ったところ、杉原紙と奉書紙が並んで近くにあったので紙面を遮光させて見たら、杉原紙は表面につやがなく柔らかな感じでしたが、奉書紙のほうは紙面に多少つやがあり光って見えたのです。紙面も詳しく眺めたところ、繊維間に何も見えないということは、これは確実に米粉が入れられて、漉かれ紙です。杉原紙は、江戸時代以前から公家たちが贈り物として杉原紙何帖と互いに贈っています。また、漉き場のいろいろな産地があると共に、産地が違えば漉き方もいろいろなものが作られています。

これで観察して非常に分かるのは、要するに米粉の溜まりが水玉模様みたいになっているのです。それは包み紙も形が崩れずにあったから、同じように折り畳んで、これはこれでしまっていますが、この杉原紙は天明六年（1786 年）正月七日の白馬（あおうま）節会で『左少辨成貞請文』（写真 25）で、包紙も当時の折り方がされたまま残っており、出仕依頼を受けた返書で受けましたという書です。

これは見慣れないと非常に分かりにくいのですが、紙面に白く丸い水玉みたいに見えるところは、米の粉が寄ってしまって玉ができたものと考えられます。この様に填料に米粉を入れて杉原紙を漉くためには、漉く紙の量に米をどれぐらい入れるかを決め、米を一昼夜水の中に浸けて柔らくしたものを引き碓で引き、粉砕された米粉を布袋に入れて漉き槽の中に洗い研ぎ出して漉いています。この杉原紙と思われるものを実験したのですが、例えば水に付けてアイロンなどで乾かすと、その部分の米粉が煮た状態となりが透明になってしまうということは、米粉が入れられているという感じです。杉原にもそういういろいろなものがあるということです。ただ、これ以外にも違う感じでありますので、当時、杉原紙自身は大量に、

いろいろな産地で作られているので多くの種類が漉かれている。

杉原と兄弟的な、この奉書紙は熊本藩主の領地安堵状で、文政九年（1826 年）九月十八日江嶋傳左衛門宛『熊本藩第十二代藩主細川斉護判物』（写真 26）ですが、本紙と包紙が同じ奉書紙が使われており、上包みの紙は杉原紙と考えられその包紙に伝達された方法が書かれています。本紙は竪紙に書かれていますが、花押は書き花押ではなく籠印で押されて墨を入れたものと考えられ、書状の折り方の折り形式が鮮明に残っています。包紙は、本紙と同じ紙を横使いで包紙とされており、包紙下方に「江嶋傳左衛門との」と書かれている。このような、伝達方法まで書かれたものは非常に珍しいものではないかと思われる。

この元禄九年（1696 年）正月十二日の歌会『踏歌節会請文』（写真 27）は、反故紙を漉き返した紙が使用されています。漉き返しの紙か、墨を入れて漉いた紙なのかどうかを見分けるには、紙背面を表にして板干しするとき紙背面を刷毛で擦り付けるため、墨を擦ったものが入ったものは墨粒があまりつぶれないので、乾燥板に貼ったとき刷毛でこするため擦られたところが筋となってしまいます。そのような紙の場合には、墨を入れて漉いたものであるとすぐに判ります。あとは、反故紙を漉き返したものかを調べるには、墨付き繊維が紙面に混入していれば確実に漉返しであると判ります。

この 1 枚ものの短冊は、甘露寺親長（1424 1500）筆の『祈恋』（写真 28）です。蓮空との署名がありますが、親長は明應二年(1493)に出家法名を蓮空と称してからの書です。この短冊は、打曇紙で上下の色が違うというもので、内曇紙とも書かれます。曇が同じ色のものは雲紙といわれています。この打曇の台紙は、土台は雁皮が使われている繊維は上の雲のところに使われているものは紺紙に染めた楮繊維を叩解したもので、下が雁皮を染色した紙を叩解繊維にしています。上は青色が多く下は紫色や薄茶色みたいなものもあります。いろいろと観察したところ、上部の雲はコウゾが多く下部のほうは大半が雁皮系である場合が多い。

これらのような一枚物を保存する場合、折りに包紙などある時にそのまま保存する方法では、その形態を崩さぬように帙に入れる方がよい。伸ばして収納する方法では、中性ボードの 2 ミリ厚を使い、ボードは下の台紙と収納するために入れる窓を作る台紙と蓋となる台紙三枚を用意する。大きさは、収納する竪横寸法より 5 分（15mm）から 1 寸（30mm）位大きく切ったものを使い、収納する書より 1 分（3mm）大きめな窓をカッターで切って開ける。開けたときに取ったボードは竪横 5 厘（1.5mm）だけ切り取って置き、窓を開けた台紙と下の台紙を貼り合体する。合体した台紙に歪みが出ている場合は、カッターなどで成形して作ります。それで、どうしても素手で握らないように、本紙を和紙の紙に挟み込んでから窓の中に入れ、抜いたボードをその上に切り取った蓋に載せ、上に全体を覆うだしをのせて完了

ですが、これではボードが動くので畳などで保護すると良いでしょう。私たちはこういう形式を作るのはすぐできますので、必ず入れてしまいます。一般的には紙でこれらを包むことが多いのですが、この様な収納容器を作って収納すれば、1 枚ものも損傷の危険もなく処理できるということです。

紙の勉強のために装幀されたものや、1 枚ものの大きな紙を買うことができなかったので、紙を知るために種々の装幀がされていた、小幅に切られた残簡を集めたものを数多く収集しております。これらには麻紙・斐紙・鳥の子紙・間似合紙・楮紙などほか、数多くの断簡を集めそれらの紙も分析して貰ってどのようになっているか勉強の材料にしました。中国の史料の料紙も集めたものなのです。数が多いため写真は掲載いたしません。料紙の本紙が、どのような繊維でどのようになっているか、たえず自分自身が確認のためにマイクロスコープの 100 倍で見ることにしています。この様なもので見ることが重要なのですが、慣れない方がマイクロスコープで自分自身だけが見ても繊維のことは把握することはできません。繊維をよく知る我々にはどういうものかは判りますが、あまり資料を観察していない方にはこれは楮だとか雁皮とは判断することはできないと思います。しかし、現在の漉かれた混ざりのない楮紙と雁皮紙を観察して慣れることで、史料の楮と雁皮との比較作業をすることで判るようになります。また、史料に充填されている填料についても米粉であるか白土か泥であるかも、虫害部分によって判ることもあります。打紙加工がされているかは、マイクロスコープで現在の和紙と比較することで判るようになりますので、この機器を使うことも考えては如何かと思います。要するに、何も加工がされていない繊維は浮いて繊維は上に飛び出ています。しかし、打紙されたものは必ず押さえ付けられ平らになっているので判ると共に、繊維自体の太さが増え少し膨らんだりしています。もしお使いになるのでしたら、ピーク社製のワイドスタンド・マイクロスコープの型式「№2034 100 倍」が、初めての方には識別しやすいと思います。

講演では、細かなこの話はいたしませんでしたが、このマイクロスコープと三脚を使い、サイバーショットのデジカメで繊維を撮ることができます。雁皮紙無加工の繊維状態（写真 29-1）、雁皮鳥の子紙の打紙加工の繊維状態（写真 29-2）、雁皮鳥の子紙の打紙加工の墨付き状態（写真 29-3）、鳥の子紙虫穴部の凝固填料（写真 29-4）、楮紙無加工の繊維状況（写真 29-5）、楮紙無加工の墨付き状態（写真 29-6）、楮紙打紙加工の墨付き状態（写真 29-7）、楮紙虫穴部の凝固填料（写真 29-8）が、マイクロスコープで撮ったものです。

写真 30 1 は『伊勢暦』です。薄様で印刷された伊勢暦と同じものなのですが、これは本紙に間似合を使っていて、このような見返しを使っていますので、多分豪商などに特別に売っ

たものではないかと思います。写真 30 2 の『伊勢暦』の方は本紙が薄くぺらぺらなのです。だから、これはそれほど高価な値段ではなく庶民でも買えたものではないかと思われ、ものすごく薄い紙に印刷されています。これはどちらかというと折本形態の分類です。

写真 30 3 は『江戸暦』です。表紙はついていません。二つ折りにされて、ただ糸綴じされてというだけ。それから、写真 30 4 の方の『会津暦』は、どちらかというと大和綴じ形式にされています。要するに、紙自体はこういう長さのこれを二つ折りにして、印刷したものを二つ折りにして、下を折られた口で、5 枚を一括に折って、こちらのほうで綴じていったという。この綴じ糸はこれの反故紙だと思います。反故紙を細く切って紙縒りにして作られたものです。

私がこんな装幀問題にこだわり始めてしまったのは、旋風葉装というのはどういう形だろうということからです。書誌学書では経巻の折本の表紙がくるんであって、くるくる回るから旋風葉装といわれていますが、中国では写経を折った書は経折装という名称なのです。その関係で日本の書誌学書ではなくて、中国での書誌学書を探しましたら、まず李致忠著『中国古代書籍史』、1983 年発行のですが現在はもう絶版となっております。それで調べたところ、中国でいわれている東西で作られた龍鱗装、魚鱗装といわれる装幀をいっている書で、呉彩鸞写の『唐韻』と称される『唐写本王仁昫刊謬補缺切韻』とのことです。その後、王以坤著『書畫装潢沿革考』1991 年発行には、その書がカラー写真で掲載してありました。

その書は、中国の故宮博物院に 1 点だけあるというのを見せてもらいたくて、何回か行ったのですが、その都度「湿度が高いから夏場はだめ」「雪が降って湿度が高いからだめ」などと断られ、そのため一度も拝んでいないのです。ただ、その装幀は巻子状にされていて、表紙部分が左肩に行ってしまう。日本形式ではなくて反対になっているような感じで、軸が巻頭のほうにある書となっています。

この書は、宋代に改装されたと説明されており、その説明と写真を基に複製を作成したもので、経典の『大方廣三戒経 巻上』（写真 31）の写真の紙焼きを和紙で行い、両面のものに加工して作成したものです。

写真 32 は大英図書館所蔵の唐代の『易経』ですが、どうしてもこの写真が欲しかったので、同図書館にいる松岡久美子さんにお願いし手に入れたものです。一番上が巻末で一番下が巻頭部分となっており、両面書写ものです。ただ、これは半月状の木を二つ合わせて左側で止められており、黒く見える 3 ヵ所部分の止めは何だろうと聞いたら、多分釘だろうということですが、打って止めて丸めてしまわれているのです。巻子本か冊子本に近いような形なのです。旋風葉装は、中国の史書では旋風叶などと称された名称が列挙され報告されてい

るのです。だから、書誌学名は私の考えでは経典を折り畳んで表紙を付けたものは経折装として説明しております。

今日まで、あまりにも中国の書籍装幀を調査していないで、日本で考えて名称が付けられておりますが、できればやはり中国と日本の装幀を調査して名称を考えるべきで、私としては両国の装幀名称を合体しようとしているのです。今、和本のことを「和本」とか「袋綴本」とかいっていますが、中国では糸でとじたものを線装本といっているのです。私は、線装本和書なり、線装本漢籍として分類して言っています。

『妙法蓮華経』という枡形本ですが、印刷本で雁皮に印刷されたものがあります。非常に珍しいものだったのですが、購入価格は 200 円代で購入でした。こういう買い方をして集めればお金はそれほど出ないので、くだらないジュースを飲んでいるより、こういうものを集めたほうが絶対にいいですよ。だから、古書店はただ 1 回ぐらい行ったのではだめで、毎回行って眺めて、そこのごみみたいな山になっていますから、そこから一生懸命探して出すといいものが見付かると思います。

例えば写真 33 の写本は結び綴装（大和綴）と称する『職原抄』です。「乾・坤」がなく「利・貞」の 2 冊ものですが、楮繊維で米粉填料が入っていて流漉きされたきれいな料紙であり、打紙加工がかなり良くされた料紙に書写されており、書写文字も正確できれいに書かれているため、まるで印刷本のような感じです。この書には刊記奥付がないため、書写年代を調査したところ書写内容に後に付記したものが書かれていることから、江戸中期以降ではないかと考えられます。綴じられた本紙端を確認したところ本紙に丁付けがされており、「利」の冊は一から百十八の丁付けがあり、貞の冊には百十九から二百二十五尾と丁付けがされており、貞の書写最終丁に尾とあることから、書写したものはこの 2 冊だけのものと考えられます。この書も古書展で手に入れたもので、単冊で 2500 円、2 冊 5000 円で購入したものである。このように古書展で販売される書は、装幀研究や料紙研究ができるので、史料を探し手に入れることは重要なことです。

この書は、打紙加工が良くされていることで裏が透けて見えるので、表裏の書写文字を観察したところ、書写文字の表裏位置の行にずれがないことは、行の割り振りをした下敷きを作り書写したものと考えることができます。

史料の修補方法は、後から修補作業方法をお見せしますが、はっきりいうと修補をするときにどういう方法を執るか、いかに伝来した史料の料紙素材の材質を変えないで、負担のでない最低限の修補ですませていけるかが、史料を生かすことではないかと考えます。

書陵部では、今、裏打ちという作業は、1 枚を当てるという作業はなるべく行わないよう

にしており、虫害・破損部分だけを穴埋めする作業方法を取っております。例えば巻物の『三十六人歌撰集』（写真 3）ですが、だいぶ前に直されていたのです。この字の途切れたところにある部分は、昔に穴埋めされていたところで、この書は金泥で草花が描かれているものに書写したものですが、この修補用紙も金泥が入っているので、多分書写用紙の書かれなかった紙を使って修理されたものです。多少手を加えないと、そのままでは史料を講演には使えないと考え、私自身がほんのわずかだけ料紙同様の雁皮紙で直しています。まだ、この書は調査をしていないので、これはお預けして調査していただこうと考えております。こういうものに限っては、修理をするときには、丸めたときに紙背面が出ますよね。そうすると、ここの全体の繊維を全部留めておかないといけないもの、この巻子本のほか、紙背が必ず外に出るものに関しては、両面書写のものも含め修補用紙の端の繊維を本紙に密着させて留めます。両面に書写されている場合、書写文字部分の字に虫穴が掛かっている場合が多いので、修補用紙を糊止めする時に多少掛かっていても読める方から埋める修補で、表裏両方から直すという方法が取られます。これは、損傷部分を表から埋めたり裏から埋めたりする方法を取り、文字が読めなくならないよう修補用紙の掛け方を工夫して穴を埋めていく方法です。ですから、通常の巻子本のように紙背が何もないものは、我々はただの虫損直しといっています。民間では、繕いとか虫繕いといっておりますが、書陵部の修補用語としては片面修補の場合は虫損直し、両面から修補するものは、両面虫損直しと称しています。

ですから、巻子本でも何でも、厚みが薄くて破れなければ、全然裏打ちをせずにそのままの形状にしております。そして、現在も九条家文書の未整理本を修補しておりますが、江戸初期前後の当主である九条道房が史料を整理したおりに損傷文書を修補しておりますが、外部に出さずに同家の下司が修理したと思われます。九条家文書は、巻子本形折本形態が多く修補したおりに新たな表紙を付けられ、大半が裏打ちされてしまっているのです。このような史料の修補では、巻子本でも裏打ち修補されていたものは全部除去しますが、虫穴と糊が付着しているため使い物にならず、その紙は使えないので本紙同様の材質の新しい紙に染色して修補しています。

修補用紙として使う場合には染色をしますが、本紙に完全に合わせるのではなくほんのわずか薄くした染色をしています。その修補用紙は本紙と類似した産地に直接特別注文したものを使って染色します。ただ、化学染料ではなく、植物染料で全部やっていますので、矢車とか、今のドングリといわれるマテバシイのカサとか、赤い葉っぱで壁に這っている蔦などや植物なら何でも染めています。特に梅の花芽が出る前に伸びた若枝の伐採をした時には、園芸業者に頼み伐採された枝を貰って係で細切れにし染料にしています。

ただ、染色するときに、作業の中で鉄の印刀を使うと、鉄媒染されるため、道具の選択にこだわらないと媒染汚染する恐れがあります。色も 1 点直すのでも、経年汚染でいろいろな色が付いているため、1 色だけではなく濃いもの薄いものをいろいろと作りますが、染色を始めると二三判（60×90）の用紙を半裁したものを 200 枚ぐらいは染めています。もちろん、それをなぜそういう方法を執っているかというと、これから修補する損傷本何種類かを一度出してもらって、それらに合わせて一緒に染色する方法を取りますので、そのためには 1 色ではだめなのです。修補用紙も本紙によっていろいろと合わせるため、いろいろな種類を用意して染色して修補をしております。

では、ちょっと修補作業の用意をするので、こちらの方の史料を見ていただいていて結構ですが、離れて見ていてもこういう史料は絶対に判らないので、近くに寄って見て触れていただいても結構です。一応大体の説明書に書いてありますから、それを見てください。善本は遠くから見ていても現実には分からないので、あまり手荒く触らなければ、触っていいですから。

＊＊＊準備（15 分程度）＊＊＊

修補の道具と実際

もしよろしかったら修補の話と、ちょっと実演しますので、いったん席に戻って下さい。

書陵部での修補道具は、写真にあるようにこのようなものを使って修補製本されております。どこでも使っているのですが、こういうものを全部使っている訳ではありません。数点ですが我々だけが使っているものもあります。特に普通の民間工房で使っていないのは、穴埋めをするときに使用する小刷毛（写真 34 1）、虫損直しをする押さえ道具の刃を取った印刀（写真 34 2）と牛骨で作ったもの、鉄のものは染色したものには鉄媒染のおそれがあるということで、牛骨で作ったものは媒染しないのでこの 2 種類を使っています。作業台の虫損板（写真 34 3）ですが、普通の 2 ㎜厚の黄ボール紙にかなり厚様の 10 匁位を両面に貼って、乾燥後に柿渋を塗っていますが、渋のままだと糊が付着しだんだん汚染するので、クリアラッカーを薄めて表面に塗装を掛けています。我々が四六時中使用している道具類で、虫損直し作業の一番の必需品なのです。

こちらも製本に使用する道具ですが、ここに棒が立っています寄せ板（写真 35）というもので、罫線のあるものを罫線をきちっと合わせたり、大きさの違う本紙を揃えるのに使用さ

れます。

これは製本をするときや書帙作製時に穴を開けるものですが。目打ち台（写真 36 1）という欅の年輪の部分を使った穴明け台と、和書と漢籍の穴を明ける目打ち 2 種類（写真 36 2）及び書帙の穴を明ける平目打ち（写真 36 3）数種と、目打ちを叩く樫の木製の叩き棒の樫矢（写真 36 4）です。

新しく和本を作るときにしか使っておりませんが、裁断する時の切型（写真 37 1）の美濃判と半紙判です。本の大きさによって切型が揃えられており、本紙に切型を置き切型の上に身体を載せて裁つ、裁ち包丁（写真 37 2）というものを使って、天地と背の三方の裁断道具ですが、本紙を揃える切型を小型化したコツ（写真 37 3）も使用します。表具師が良く多用しているのが、この丸裁ち包丁（写真 37 4）といって丸い包丁。我々は裁断時に靴屋が皮を薄く削ったりする皮すき包丁（写真 37 5）を使っています。

製本・成巻に使用する鋏は、昔は人形の毛を切ったりする柳刃の鋏を使っていたのですが、今は事務用で販売されているシルキーの「ネバノン NBN 170」（写真 38）という鋏を使用しております。3,000 円前後の価格ですがインターネットで「ネバノン」を検索すると、この価格より安いものが出ているのでネット購入した方がよい。これは非常に刃の厚みが薄く、セロテープなどの接着が付かない鋏です。これが綴じ糸を切っても紙を切るにも最適なもので、事務用品のはずでこの形が使いやすいのでこれを 1 本持っていれば、糸切りや紙切りほかにいろいろなことに使える鋏です。

打ち道具の槌（写真 39 1）3 種で、一般的に売っているもの。虫損直しをすると、同じところに穴が開いているからそこの部分が高くなるため、その部分を打紙と同様にその部分だけを潰してやるために使用しますが、すでに打紙をかけられたものはなかなか沈まないのですが、打つことによって多少ですが沈みます。打紙ととられるかも判りませんが、修補された穴の部分だけを叩き潰す作業であるため許される範囲ではないかと考えます。和紙の場合はいいのですが、漢籍を、虫損直しをしてから打紙を掛けると裂け破損が生じますのでやらないこと。漢籍の場合は、虫損直ししたものは 3～5 枚位を締機械で押す方法を取ることが良いでしょう。また、巻子本や掛け軸の裂などを折ったところを打つための象牙の槌（写真 39 2）と、筋入れするための牛骨ヘラ（写真 39 3）や象牙ヘラ（写真 39 4）がありますが、象牙ヘラは 30 センチ以上のもので薄いへらです。現在では象牙のヘラはこの長さは作ることができず、箸の長さまでしか作れません。あとは成巻、製本時の裁断や筋入れほかに使うものとして、定規（写真 40 1）と物差しの尺差し各種（写真 40 2）が必要となります。これらは、表具道具専門店で販売されております。

成巻・製本・書帙作成に使用する消耗品には、巻子本の巻緒の組紐各種（写真 41 1）、糸綴じ本の絹糸各種（写真 41 2）、書帙に使うコハゼというつめですが、書陵部では甲馳(こはぜ)と書いており象牙・牛骨製の甲馳各種（写真 41 3）があります。

それと、裏打ちした書を裁断するための器械として、押し切り器（写真 42）があります。ボール紙なども切ったりする器械で、定規に蝶番が付いて移動ができ幅を決められるようになっており、下部の手前の定規に合わせ直角にすることができます。線装本の場合は、本紙を切らないように地側一方だけを切って、天と幅は全丁の天地と幅寸法を測って一番大きな寸法を定規を動かしその寸法にして止めて切る。刃と平行している定規が稼働するようになっていますので、刃の幅に測って止め下部の定規に合わせて直角に切れるようにできます。我々は、これを巻子本を成巻するときに使いますが、裁断前に 1 枚 1 枚下を切って継ぎ目幅を取り切って接ぎ、巻きとしたものを天地寸法に定規を合わせ、地の方を軸巻紙の方から少しずつ切りながら、前に滑らす送り切りという方法を切っています。

この裁断機は大中小があり、大は裁断幅 75 ㎝・中は 60 ㎝・小は 45 ㎝などとなっています。大きなほうは書帙を作るためにボール紙裁断用、中は巻子本用、小は線装本本紙裁断に使っております。堅いものなどを裁断すると刃が切れなくなるため、それぞれの使用用途を決めて使用することにしております。

修補に際しては、裏打ちしても虫損しても糊や薄糊を使うため、紙が水分で暴れ皺ができるため締めて押しをする機械を使います。木製と鉄製がありますが、鉄製締機械（写真 43）は線装本や巻子本の修補後に皺を伸ばすための機械で、線装本を締めるときに使用する板はボール紙を竪横に 5 枚貼った厚板に入れ締めています。巻子本の場合は、本紙が入るボール紙に入れ上下に木製の厚板を当て締めていますが、中に入れる時には水分を与えなくても 1 週間以上を強く締めて置くことによって、ほとんどが平らになります。現在では、この様な大きなものが作られなくなっておりますが、製本機器を扱うところで洋本用の小型なものがありますので、代用として使うこともできると思います。

これらのほかにも、箱帙や巻子本の軸作成時にはのこぎりやカンナと金槌、ピンセット・千枚通し・カッターなども使っておりますが、市販のものを手に入れ使用しています。

製本するに当たって問題なのは、糸綴じするときに使う目打ちですが、現在市販されているものは先端までが糸が 5 本も 6 本も入るような太さなのです。それをどうするかというと、砥石ではなかなか細くならないのでグラインダーで細くする必要がありますが、細く削るときに徐々に細くしないと熱でなまくらになってしまい、目を打ったときに柔かいため曲がってしまいます。グラインダーで細く削るときに脇に水桶を置いておき、削っているときに指

先で触れあまり熱くなる前に水に浸け冷やしながら細くすること。私は、和本用と漢籍用の2種類の目打ちを使っており、漢籍は細糸2本使っても和書用の穴では綴じても穴が目立ってしまうので、かなり細めにしております。普通の和本用は、糸が1ミリくらいの太さであるため綴糸3本が通る太さにします。

綴糸ですが、普通の和綴じ用は上野の「道明」という店で糸を作ってもらっていたのですが、機械縒りができず手で撚るしかないというので、なかなか手に入れることが難しくなっております。そのため、市販されているものを探したところ、蔵前の糸屋さんにあるとのことですが、その店の品もちょっと縒りが柔らかすぎて、あまり良くないとは聞いております。

代用できるものがないかと探したところ、大工道具ほかを販売しているところで見付けたものですが、純絹100%の坪糸「たくみ」（写真44）という3本撚のものがありました。大工さんが木材に線を付けるもので、墨壺の中から引き出してパチンと放して線を付けるための糸です。このような糸は、大工用品などを取り扱っている大型量販店などで販売されているはずです。ただ、これは生糸ですからちょっと硬いので煮てから使うといいだろうと思います。小巻15mものは1個250円前後、長巻き73mものは1,000円前後で2種類があります。綴糸があまり手に入らないときは、これを和本の綴じに使ってかまわないと思います。この様に、糸も購入するのにかなり難しくなっておりますので、糸販売店を電話帳のタウンページで探し、綴糸に使用できるものがないか聞いてみることです。

例えば、和本の元綴じを切らずにそのまま修補する方法を教えますと、虫害で取れそうな部分がありますが、その虫穴部分の穴埋めするときには修補用紙は和紙であれば、本紙より薄目のあまり厚くないものを使います。これは、完全修補のように色を本紙に合わせる必要がなく、損傷を防ぐための破損止めの修補だと考えてやるためで、純和紙を和紙販売店で買って用意して置いておけばできることなのです。

虫穴の大きさを考え、破損部分の穴よりも大きめに手で和紙を繊維を出しながら、全体をふさぐ大きさにすることです。損傷部分は本紙が竪紙の場合は修補用紙も竪紙を使います。修補用紙をはさみで切ると、切断面のところが本紙に負担を掛けることになりますので、必ず修補紙の繊維を出しておくことが重要です。

糊は生麩糊が良いのですが、一般的にはありませんので大和糊を代用しても良いです。なぜかと申しますと、大和糊はタロイモ等の澱粉質であり、子供が使うため舐めてしまうことがあるため危険なものが添加されていませんので、代用しても良いと考えられます。

糸を切らずに原装のまま修補する方法では、まず虫穴より大きめに修補紙を繊維を出して裂いたものを用意します。糊付けはあまりべとべとに付けると本紙が滲みになるので、穴埋

めする修補紙にかすれるぐらいにまんべんなく付けて下さい。貼り込み方は、天地部などであれば袋を開けたまま手でできるものもありますが、中央部だった場合は手を入れることができませんので、何か差し込む支持体がなければできません。我々がよく使うのは、事務用アクリル定規で、その上に乗せて、そこのところまで持っていって押さえて貼ります。ですから、本紙の袋の口を持ち上げ膨らませると、虫穴部分に差し込んでその部分に合わせ上から押さえ付けて貼るとこの様になります。天地部の部分も同様にした方が危険性がありません。ただし、数枚を続けますと同じ部分に水分が来てしまうから、1 枚やったらその前後に厚葉の和紙を挟み重しをして乾燥させ、その間別の場所を修補して行く方法を採ればよいのです。修補後には本紙より出た部分を挟みなどで切ればいいだけです。この方法を取って虫穴の部分だけを穴埋めするので、破損危険部分だけは危険性を回避できることになります。また、穴があっても危険のないところは、無理やりやらなくても絶対手を出さなければいいので、糸綴じも切らないので原装のままにすることがあります。我々のような職人に修理を出すと、全部の穴埋め修補をしようとしてしまいますが、作業方法と必要性も考慮して依頼すべきと思います。解体しないで修補する方法をお見せしましょう。（損傷部分より大きめに切った修補紙の糊付け（写真 45）、本紙の袋を持ち上げ糊付け修補紙を定規に載せて差し込むところ（写真 46）、損傷部分に貼った部分を手の平で押さえ良く貼り付けているところ（写真 47））

解体して虫損直しを行う場合は、この書を例にすると虫穴が竪になってかすかにしか判らないのですが、細長いミミズみたいな所があります。我々は直し紙を使うときに必ず手に持てる大きさとした紙の四周から最初に繊維を出しておきます。現在の和紙は、流漉きという竪揺すりして漉かれますから、本紙も竪紙になっていたらその修補紙も本紙同様に竪紙を使用して、修補する方法を執っています。手で修補紙を裂きながら直すことができますので、このような細長い所はそれに合わせて大少大きめに手で切って、貼り込んでもかまわないです。丁に穴がずっとあるのだったら直さなければならないけれど、少ししかなければ手でちぎって貼る方法を執られれば直せます。逆に細長ければ、長いほどその筋にうまく合わせるコツは慣れないとできないです。

実演に入ります。まずこれは覚えておかれるといい、無理に本を糸切り分解しなくても直せるという方法です。この修補紙をちゃんとその位置に合わせて・・・合わない（笑）。うまくいかない。ずれてしまった。この細長い穴は、2 回ぐらいに分けて穴埋めしたほうがいいのかもしれないですね。細い部分がずれてしまうのです。（やり直して）このやり方を覚えておきさえすれば、今後こういうものを見たとき、そのやり方をすればいいのです。

これからやるのが完全修補をするときにやられている方法です。修補する前によく見ていただくと分かるのですが、虫喰い穴というものは、穴の周りが虫の糞で黒くなっています。修補前には、それをできるだけ除去しないとその部分が黒く残ってしまうため、傷付けないようにクラフトナイフの先端で、徐々にそれらを取り外していくという方法を執ります。手でやってもほとんど取れませんので、このナイフを使うと良いと思います。

虫損直し時に使用する修補紙の押さえ道具の印刀ですが、民間工房ではほとんどこのような道具は使っておりません。民間工房では、ブライトボックスのような下からライトを当てるものが使われています。虫害損傷した史料の本紙紙背を上にして載せ、その上に修補紙を載せてライトを当て、虫穴より少し大きめにシャープペンシルで穴の周囲を描き込み、その修補紙を外して鋭利なメスみたいなものを使って切ります。それから、その切られた部分の周りの繊維をまた出して穴埋めがするのです。ですから、この作業では貼り込むまでにはかなりの時間を費やします。

我々は史料があまり汚れがついていなければ、クリーニングは行わずに直かに本紙に糊を付ける方法ですぐに作業を始めてしまいますが、この虫損直しには 2 種類の作業方法があります。一つは紙背が内側に入る線装本の袋綴の場合で、薄葉なので周りの穴より外側の繊維は密着させずに浮かせて穴埋めがされますが、これは水分が加わって乾燥時に皺ができるのを少なくするためです。もう一つは、紙背が表に出る巻子本や折本と両面書写の粘葉装と大和綴装などで、書写面や紙背面の表面が出るものの場合は修補紙の繊維を穴にギリギリに掛け、繊維の浮きがないように密着させます。この作業では、糊を付ける量も加減します。あまりべとべとに付けないように虫穴の周りだけに糊を付け、糊付け部分に修補紙の繊維をギリギリに掛けて印刀で押さえて密着させた後、貼った穴に沿って引きちぎります。この方法ですと、民間工房の方法より短時間で穴埋めができるのです。（糊付け作業で手に印刀と小刷毛を指に挟んでいる（写真 48）。虫穴が二股になっているため片方を止めるため印刀で押さえているで、小刷毛が糊付けの時と違い指の間で横になっている（写真 49）。残った部分に糊を付けたところ（写真 50）。穴埋めされた虫穴（写真 51））

貴重書のようなものは小さな丸い穴も全部埋めてしまうのですが、印刀の先端を使うことで簡単に穴埋めができます。私どもは、左手に修補紙を持ち右手は印刀と小刷毛を穴埋め作業の時に必ず持ちっぱなしです。糊を付けるときには印刀の後方を薬指と小指で手のひらに押さえ付け、小刷毛を親指と人差し指で持ち薬指で支えて糊付けをし、次に小刷毛を回転させ薬指と人差し指に挟み印刀を親指と人差し指で持ち、中指・薬指・小指で支えて修補紙を押さえて貼り込んでいます。この糊付けと印刀の押さえ作業を繰り返し行っているのです。

このように修補作業で使う道具を駆使しているため、短時間の穴埋め作業が可能になります。この道具類で作業をすると、ひどいものでも 1 日 20 枚、30 枚は直すことができます。

汚染や染みになって色が付いている場合は、染色した紙を用いて穴埋めをしている。書陵部では、染色紙は草木染めで、媒染剤は灰汁を使って行っており、多種多様の色や紙を染めています。また、本当はよくないことなのですが、昔から端本や表紙だけを買ってその端本を分解し、原史料の修補用として、表紙は表紙直し用に、見返しは本紙虫損直し用に使っていました。最近は史料破壊であるためあまりやっていません（笑）。今は端本が少なく出てこないのと、1 冊が下手をするとものすごく高くなってしまっているためです。

いろいろな修復工房などを見られる機会があると思うのですが、私共のような修補方法はほとんどやられておりません。現在も和書をこの方法でどんどん直しているのです。ただし、唐本の場合は、竹紙ですから本当は共紙で直さなければいけないのですが、共紙で直しても必ず破けやすい紙のため、本紙厚に類似した薄美濃紙を染色して修補しております。これは戦前ぐらいの毛邊紙なのですが、簡単に破けてしまいます。大きなところはこういうもので直しております。今売っている毛邊紙は、本紙よりかなり厚葉のためこれを直し紙に使えといっても合わないのです。本紙が劣化のため薄茶色に変色している場合などは、本紙に合うように染色して直し紙を作るという方法が執られます。

漢籍の修補も非常に多いので、そのために表紙用にかなり厚い二番唐紙をある程度合う色に染めて用意しておくわけです。単色ではなくて、染料を何色かを掛け合わせて染色しています。

この修補も、繊維を出すようにして全く同じ虫損直しで行いますが、この本紙の問題点は、水分をものすごく引くために、あまり緩い糊を付けると滲みになってしまうということです。料紙には、結構劣化汚染や薄汚れがあって水分で滲みになってしまいますので、このような料紙の場合にはかすれるぐらいの糊付けでいい。糊が付いたか付かないぐらいの感じです。

このような虫損直しの修補方法は、習うより慣れろです。ですから、古本屋や古書展に行って虫害本を購入し、その書を家に帰ってお暇なときに一人でやって見ることです。この糊刷毛や小刷毛などは、稲荷町の宮川刷毛店というところで購入ができますが、小刷毛のみは「宮内庁が作っているのと同じ三分の小刷毛が欲しいのですが」といって、作ってもらうしかありません。

唐本の版心というのは裂けますでしょう。そのときも同じことをやっているのです。版心部分の取れた間だけを糊をずっとつけて、くっつけていくのです。いっぺんにできなければ何回かに分けるようにして、糊をつけすぎないようにするというのが基本です。糊をつけす

ぎると、必ず中国の毛邊紙はしみができますので。

（Q）　糊はどういうものをお使いなのですか。

（吉野）　糊は小麦粉澱粉を精製したものです。私のところでは松本久夫商店で買っている顆粒状のものですが、置いているところが少ないのでまとめて購入しております。ただし、漂白されているようなことをいわれたので、ちょっと心配かなとも思っております。

漢籍の、版心が切れているものは、染色した薄美濃紙を繊維を出して付けているため、1枚ならあまり凹凸ができないのですが、これを何枚も何枚もやると版心部分がかなり厚く山になります。我々は、押しの機械で3枚ぐらいを押し板に挟み、押しをして厚くなったところを潰しております。ただ、それでも凹みません。この書の場合は、繊維が弱すぎて叩いて潰すわけにはいかないのです。膨らんだ部分をたたくという作業は一切できません。

この書を見てもよく判ると思うのですが､繊維がこんなに劣化してしまっているでしょう。特に書の周りは特に変色してほとんど赤くなりだしていますが、まだこれぐらいだったら裏打ちもせずに、虫損直しの部分修補だけで全部直せます。劣化が進んで締まったためにひび割れするような紙となっている場合、取り扱いするときにも丁寧に扱わないとだめなので、そのような史料の場合には裏打ちする場合もあります。ただし、裏打ちするものに関して、我々は何回もいろいろなものを見て触って本紙を把握し、状況的に虫損直しか裏打ち修補か判断して進めることにしております。

ただ、このような漢籍には面白いものがあり、表紙に染色している境界ができてしまっているものが見られるのです。こっちが茶色で、ここが白っぽくなっているので、これは染色している可能性もあるのかなと思うのです。どういう状況で出版されたか不明で、おそらく古い書とさせるためのものに加工したものではないかと思うのですが、あまりにも染色の仕方と紙の無駄を省いた結果ではないでしょうか。古い本の版木を使って刷って年代より古く見せるために、余計な処置をすることがあるのです。本当に染色して製本されているものが多く見受けられます。

また、よく昔は版心が裂けていると、その間を糊止めしてしまっていることがありますが、劣化した料紙の場合はまず始末に負えないものとなっています。版心が糊止めされた元版を、劣化が酷いため裏打ちしたことがあります。その史料は、劣化のため折り曲げると取れてしまうからということで、版心部分の貼られたところを剥がすに剥がせないため、裏打ち修補をすることにしました。その部分を覆うために吉野紙みたいなすごく繊維の薄紙に染色して、

版心の貼った部分より少し大き目に喰裂きした修補紙を作り、先に表側より修補用紙に糊を付け貼られた版心をくるんでしまったのです。そして版心を貼った後に、紙背の片面ずつ裏打ちをしたのです。片面を持ち上げ下になったところを糊付けして裏打ちをし、それを剥がして反対側に返し同様に裏打ちすると方法で修補しました。版心を糊で止めておけば印刷面は見開きできるので、昔はこういう作業をしてしまっているのです。

今直した版心部分に違和感があるかどうかは見ていただくと判ると思います。直した部分は近くで見ないと分からないと思いますので、少し近くに来て見てください。唐紙のほうは裂けやすく破れやすいものですが、取扱いを丁寧にすれば普通のものは大丈夫ですので。どうぞ、見てください。

このように書陵部の修補では、道具を使用して直接本紙を修補する方法を取っており、早く修補が進むように考えている。また、修補では虫損直しが主体となって、よほど本紙が蒸けていたり水ぬれ劣化などで痛んでいないと、裏打ち作業はしないようにしている。この理由は、近年では料紙素材や加工なども支店に入れられるようになっているため、裏打ちをして本紙を変化させないためでもある。

今回の講演では、装幀形態をオープン展示して原史料を良く観察してもらうことによって、それぞれの形態を覚えてもらうことが必要であったからである。このようなものを講演するには、半日くらいないと十分な講演ができないのであったが、時間が少なかったために話を簡単に進めてしまった。お聞きになった方には内容を十分に把握されなかったのではないかと思われるが、修正したこの文面で多少ご理解できるのではないかと思う。

【写真】

※紙面の都合上、写真を白黒で掲載していますが、Web 上でカラーの写真を公開いたしますので、そちらもご覧ください。
東洋文化研究所図書室ホームページ: http://www.ioc.u tokyo.ac.jp/~library/

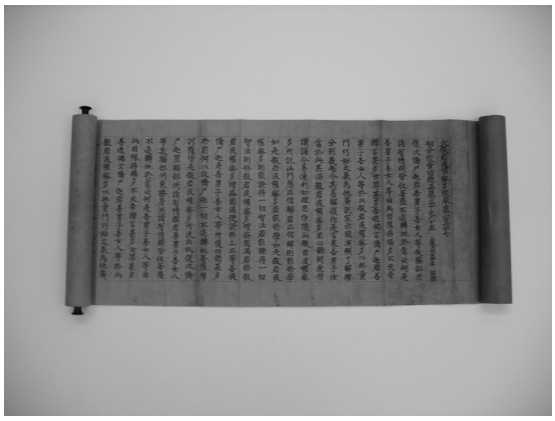

写真 1

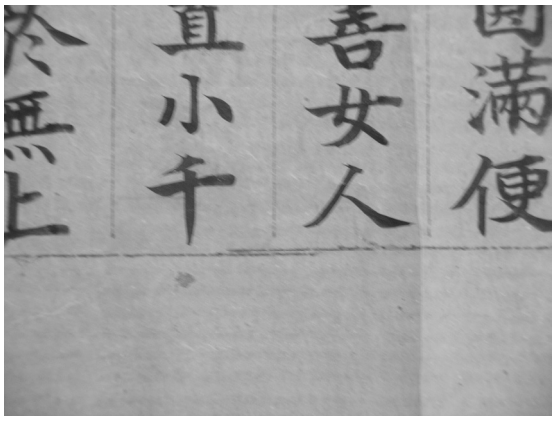

写真 2

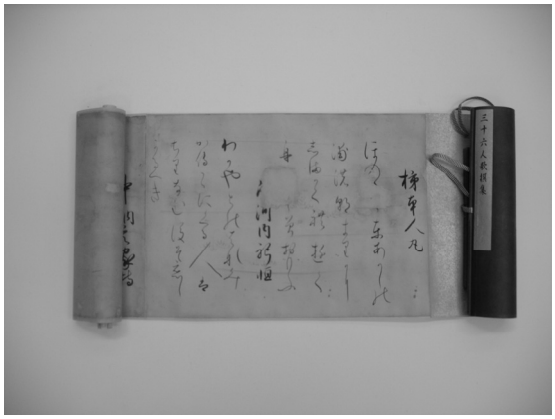

写真 3

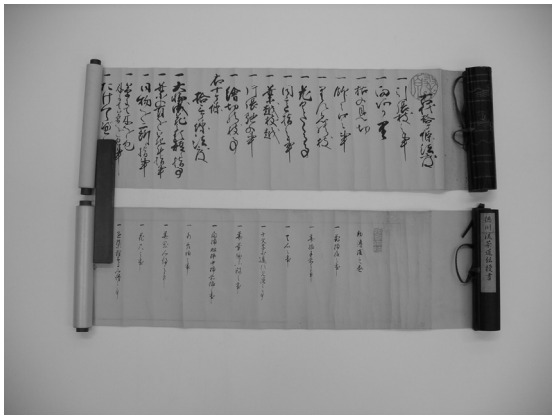

写真 4

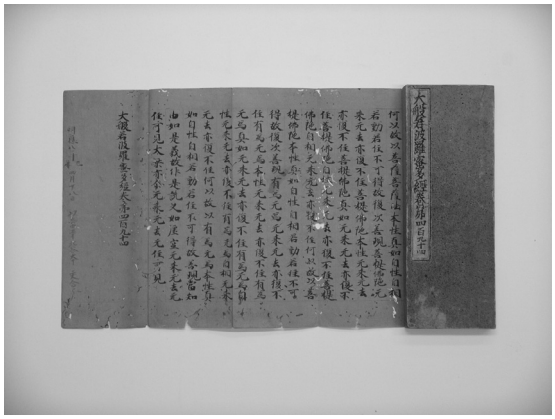

写真 5

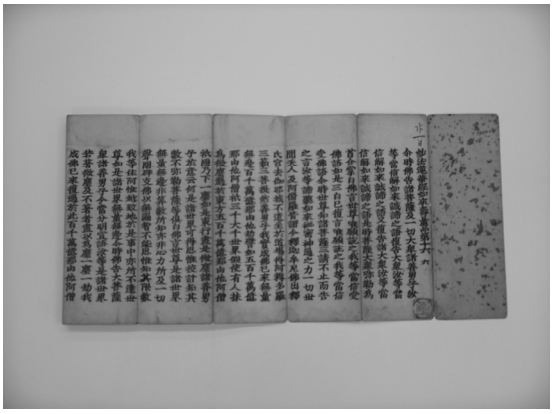

写真 6

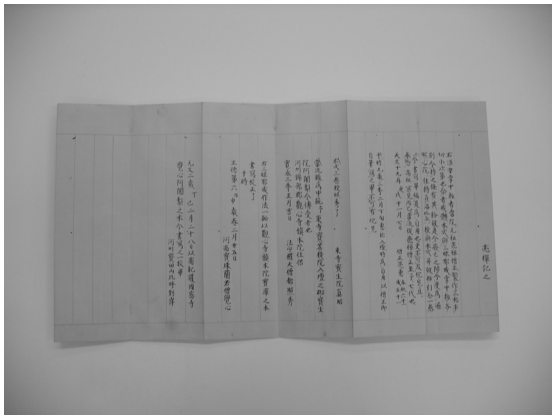

写真 7

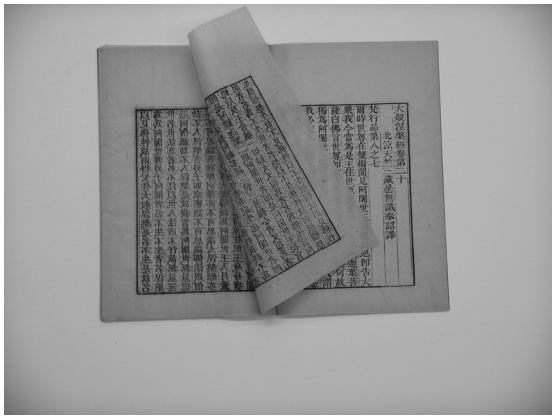

写真 8

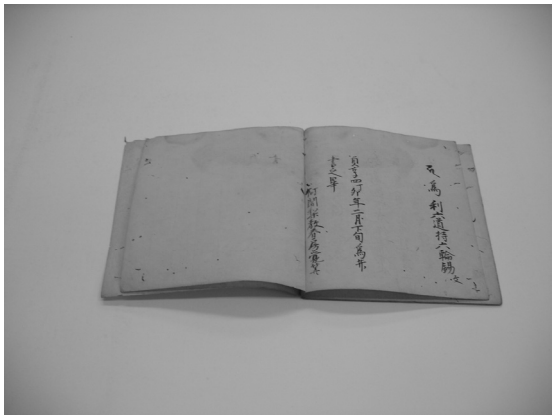

写真 9

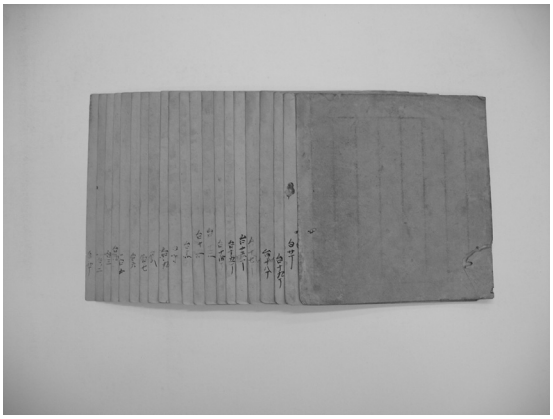

写真 10

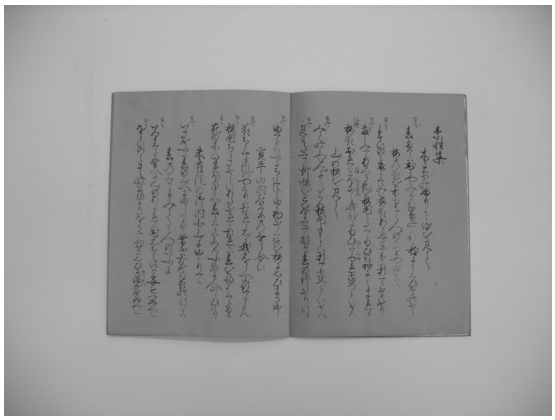

写真 11

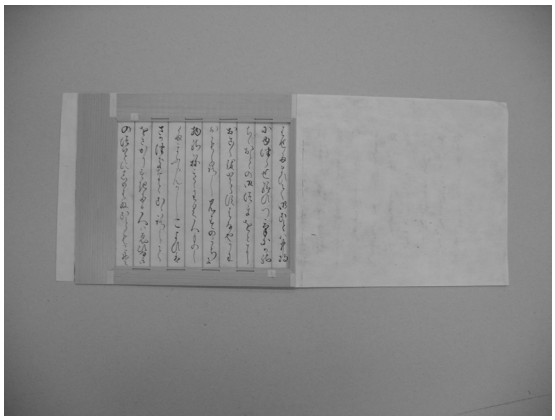

写真 12

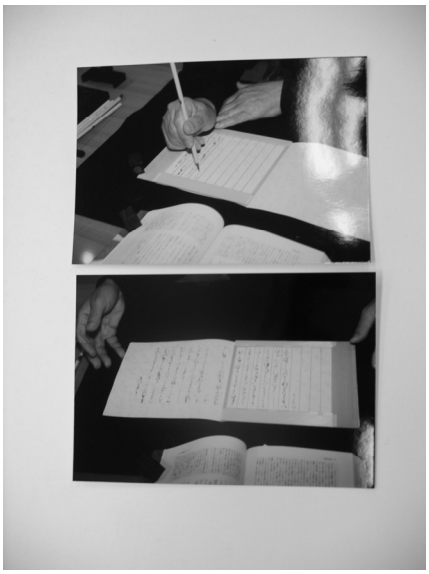

写真 13

写真 14

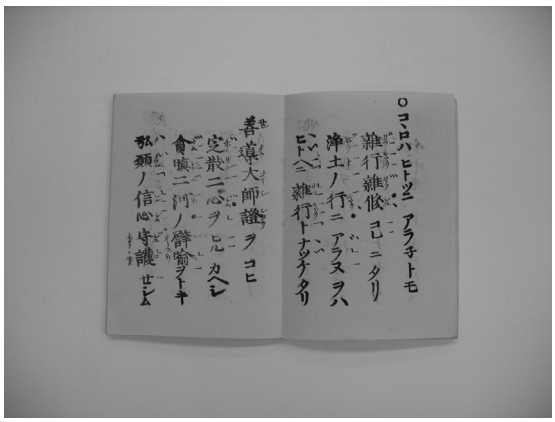

写真 15

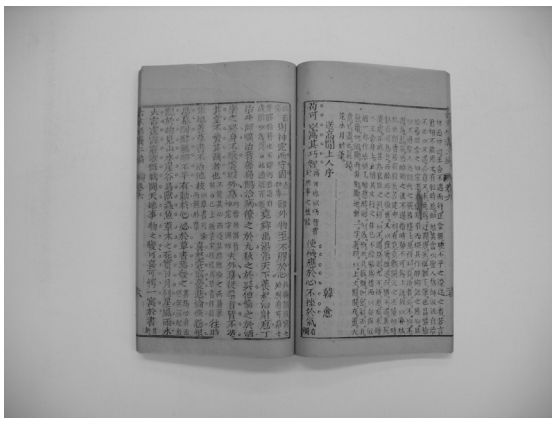

写真 16

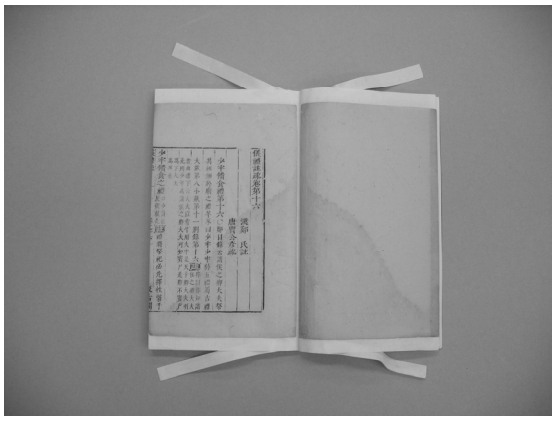

写真 17

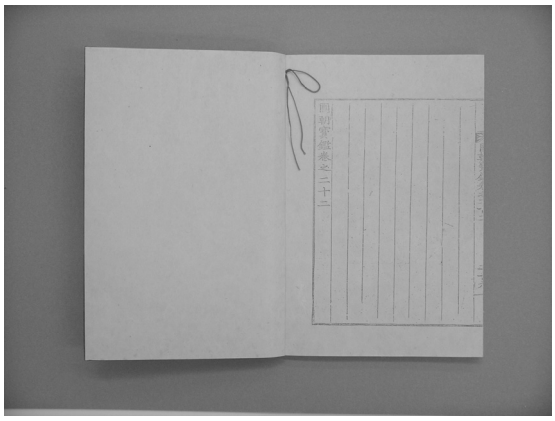

写真 18

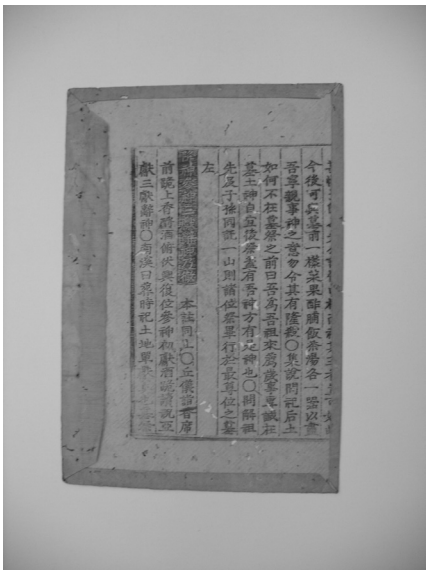

写真 19

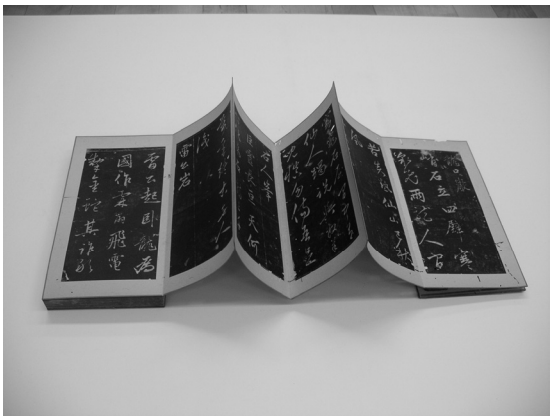

写真 20

写真 21

写真 22

写真 23

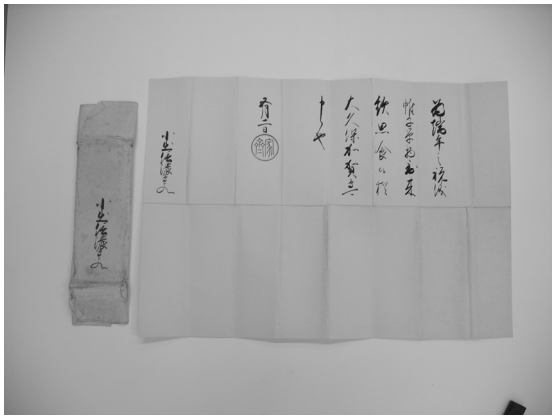

写真 24

写真 25

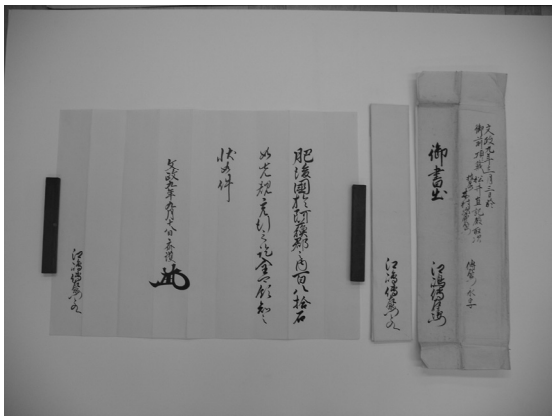

写真 26

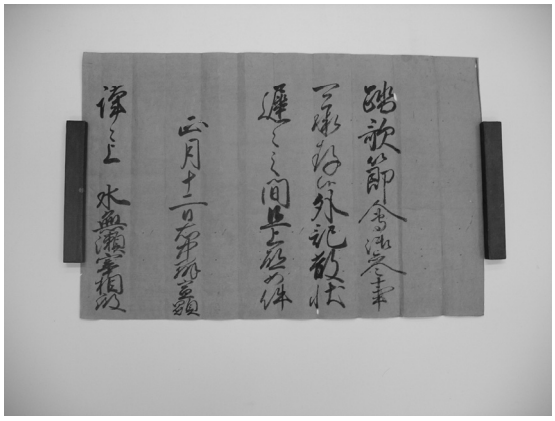

写真 27

写真 28

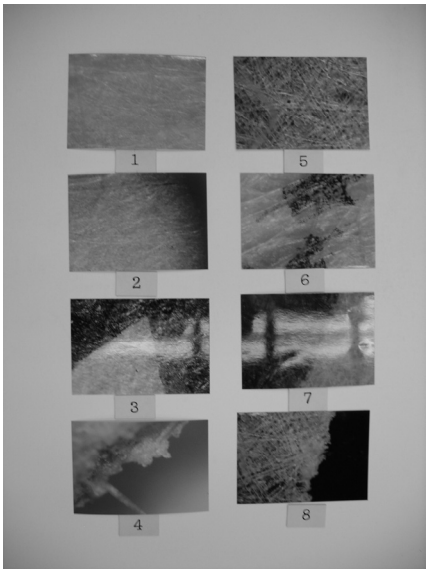

写真 29

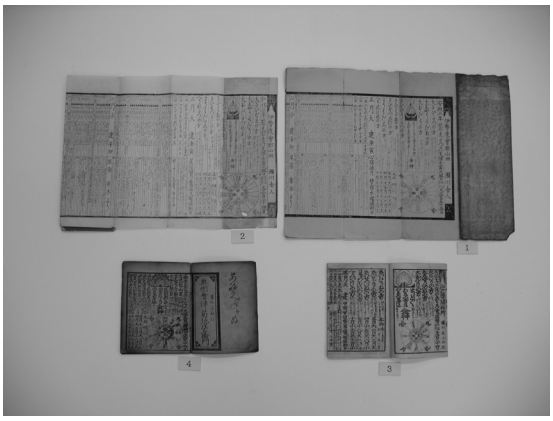

写真 30

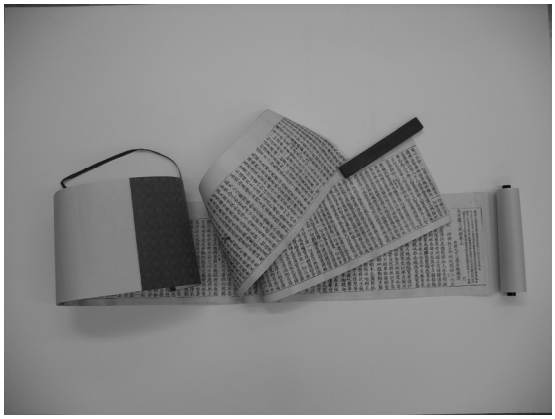

写真 31

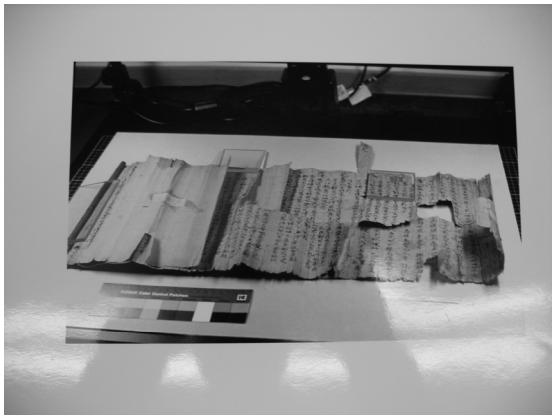

写真 32

写真 33

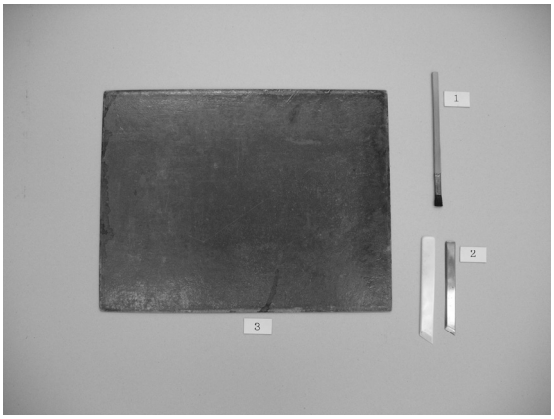

写真 34

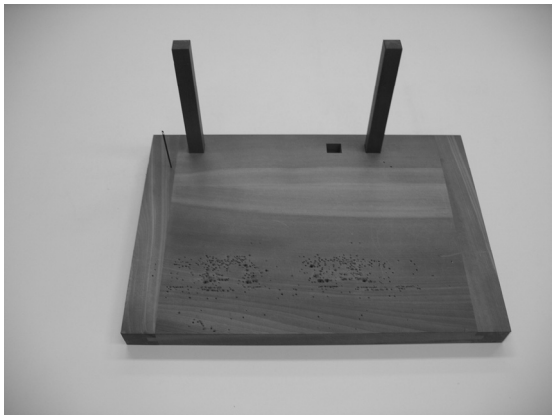

写真 35

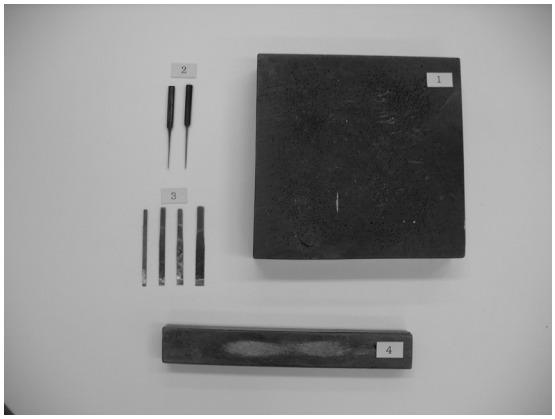

写真 36

写真 37

写真 38

写真 39

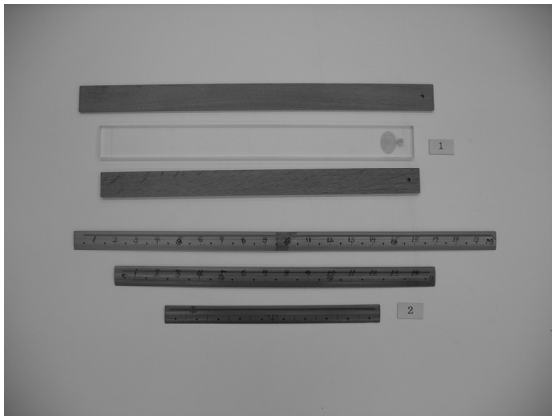

写真 40

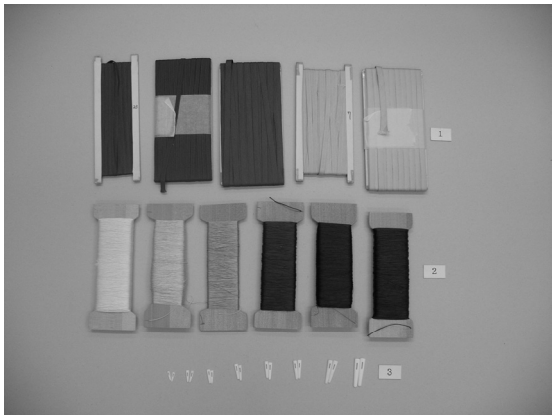

写真 41

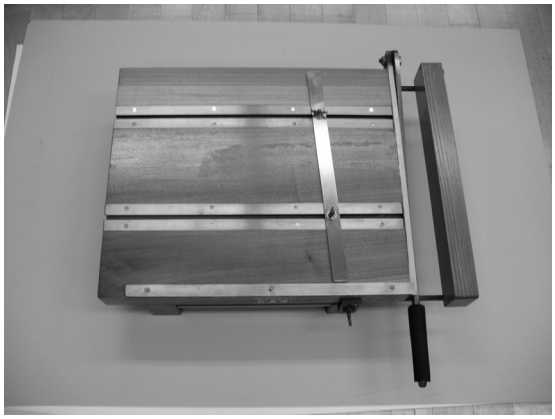

写真 42

写真 43

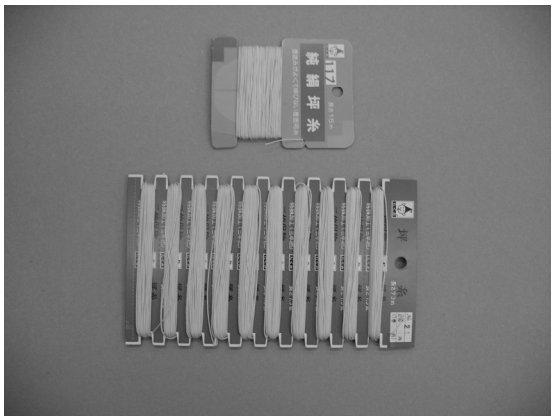

写真 44

写真 45

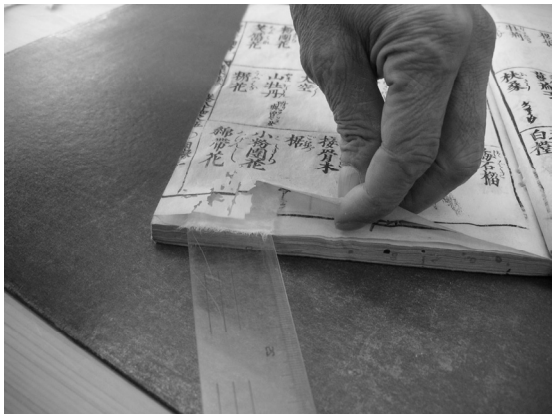

写真 46

写真 47

写真 48

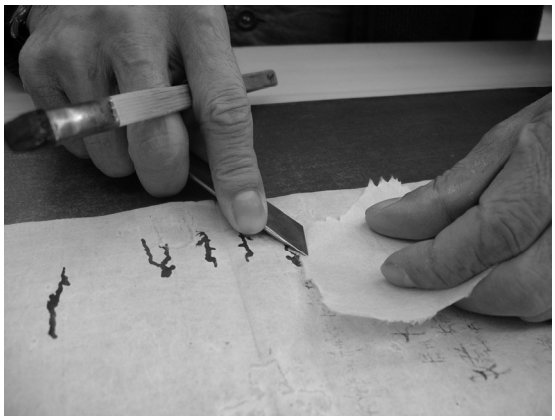

写真 49

写真 50

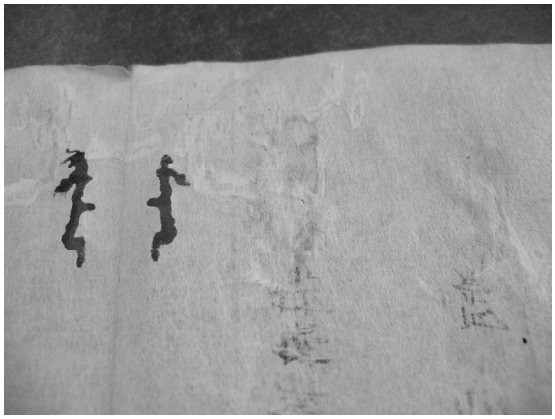

写真 51